

## ● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●

入選

田中 美音 (たなか みお) 由木中 1年生

作品名：流星ワゴン

図 書：流星ワゴン

本を開いた瞬間、私の手は止まった。この上ない孤独感と喪失感が読み進むたびに頭をかすめる。それは今まで経験したことのない大きな発見でもあった。

あなたは、「死にたい」と思ったことはあるだろうか？ありえない話かもしれない。だが今、日本では自殺が少ないとは言えない。現に、この本でもそれを感じさせる。

家族が壊れ、会社もリストラされた僕、一雄。一雄もある夜、死にたいと思っていた。一雄の前に、赤色のオデッセイが止まる前までは。一雄はすごく小さな男だった。後先考えず行動して、後になつたら後悔しか残らない。そんな男だった。私も一雄と似ていた。後悔ばかりする、そんな小さな中学生だった。私はまるで一雄になったように、物語のオデッセイに乗りこんだ。オデッセイに乗ると、その人にとって大切などこかに連れていかれる。孤独と喪失感しか感じなかったのに、いつしか本当にオデッセイに乗っているような暖かみを感じた。私にとって大切な場所とはどこなのか。少しづつ暖まっていく一雄の感情とはうらはらに、私は冷たさを感じながらぼつりと考えた。「自分の大切な場所」それは誰にでもあるものだと思う。〇歳の赤ちゃんだって、百歳のおばあさんだって、心に残る場所、暖まる場所はきっとあるはずだ。一雄は、そんな所に立っていた。オデッセイのドライブ最後の、一雄にとって一番大切な場所。忘れられない場所。そこは、自宅だった。息子は心に傷を負って暴れ、妻はもう一雄を愛せなくなってしまった。そんな苦い現実の場、自宅。一雄の手は震え、顔からは汗が滴り落ちる。だが目だけは、輝きに満ちていた。現実を少しでも変えられたら。その想いを強く抱き、一雄は現実世界へと一步踏み出した。私は一雄のその姿に、思わず心をつかまれた。あんなにちっぽけな一人の男が、家族を幸せにしようと変えられない現実に、精一杯歯向かっている。オデッセイは乗った人の大切な場所へは行けるが、その現実、未来は変えられない。だが、一雄はその理不尽な線から一步踏み出し、家族を引き戻そうとしたのだ。一雄は、なぜここまでするのだろう。家族が暴れ、離婚したいのならもう、そのまでいいのではないか。一雄の強さを知るたびに、私の中でそんな疑問がうずまいた。

一雄は家族を引っ張り、最後の力を残した。そしてまた夜のオデッセイ、非現実へと乗りこんだ。オデッセイを運転するのは、五年前に交通事故で死んだ父と子、健太だ。二人はこの世に未練があるため、成仏できずにいる。

こうして生と死の間でドライブをしているのだ。一雄のドライブも、もう終わりに近づいている。父子は運転しながら、他愛もない話をくり広げていた。私はそんなどこにでもいそうな父子がもうこの世にはいないと思うと、とても切なくなつた。

時間でいうと、十分もない所だろうか。一雄に生か死かを決める、最後の時間がやってきた。助手席に座った健太くんは時間がきたのか、一雄に最後の質問をした。

「おじさん、どうするの？サイマーの現実、やってみる気、ある？」

「あるよ。」

私は一瞬、息がつまつた。心臓が力強く脈を打つ。健太くんは続ける。

「サイマーの、サイアクの、もう、めちゃくちゃでどーしようもない現実でも？」

「ああ……帰りたい」

小さなピースは、一雄の胸の奥のどこかにぴたりとはまつた。私の心の中でも、新しく光を放ったピースが心にはまつた。私は一雄のその言葉に、強く胸を打たれていた。あんなに後悔ばっかりして、あんなにたよりない一雄が、サイマーの現実に帰ろうとしたのだ。いつしか私は、一雄の人生に拍手をしたくなっていた。健太くんは私より先に、大きな拍手を起こしていた。一雄は幸せを取り戻すために舞い戻った、天使なのかもしれない。私も、こんなになりたい。初めてそう思った瞬間だった。不器用で、情けなくて、ちっぽけで後悔している。だけど、他人の幸せを願うため大きく変わった。そんなになりたい。そう思って、私は気づいた。一雄は家族がいたから、生きることを決められたのだと。家族がいるから、幸せを掴もうともがいたのだと。私の心に淋しさや切なさ、喜び…様々な感情が溢れ出た。同時に幸せの偉しさ、生きる事の大切さも一雄から学んだ。本を開く手に一層力がこもる。

私は一雄のような人間になりたいと思った。でも半分は私のまでいたい。この先どんなに辛いことがあっても、悲しくなっても、一雄を思い出せば未来を信じて強くなれる気がする。半分私のまでいたいのは…後悔して悔しがる所も、少し、一雄と似ているからだ。